

間接レファレンスサービスの取り組み ～津島地域の文化拠点を目指して～

園田俊介（津島市立図書館）

津島市立図書館では、特に郷土関係のレファレンスに力を注いでいる。また、職員自身からも積極的に郷土資料・情報等を調査発信し、地域との関わりを深めるよう努めている。今回の報告では、郷土に関する取り組みについて紹介する。

○津島市立図書館のレファレンス傾向

津島市立図書館では、郷土関連のレファレンス件数が最も多い（簡易レファレンスは除く）。津島は古い歴史と伝統を持ち、近代以降「すりばちの底」と評されながらも繁栄を享受した時期があるため、独特の気質と郷土愛が強い地域となっている。また、近年は地域の活性化を図る取り組みが盛んに実施され、津島の歴史・文化について調べる住民も多い。

しかし、地元の歴史を系統立てて解説すべき資料－『津島市史』－は「論文集」の形態を採用したため内容が極端に偏在し、地方志としての利用価値は著しく低い。こうした要因から、調査が比較的難しい郷土関連のレファレンスも多いのである。

○津島市立図書館の状況

津島市立図書館は明治28年（1895）に開館し、明治30年（1897）に全国31館目の公共図書館に認定された屈指の歴史を持つ図書館である。その後、名称変更11回、所在地変更10回を経て、平成12年（2000）に新築開館。平成19年度（2007）より指定管理者制度を導入。地域の活性化を図る「NPO法人まちづくり津島」が受託している。

図書館の運営にあたっては、指定管理者が公共・大学・専門図書館勤務経験のある館長、副館長、事務長を新たに任命する一方、業務の円滑移行を重視し、市が雇用していた嘱託・臨時職員を同条件で全て再雇用した。

初年度は郷土関連のレファレンスに対応するため、担当職員の育成が緊急の課題となった。担当職員は2名。現在は館内展示や郷土史講座の講師を担当している。

○郷土資料の整備・充実

一般に、間接レファレンスにはレファレンスコレクションの整備が前提となる。しかし、それ以前に郷土資料のコレクションが少ないという問題点があった。（近年、津島では郷土本の出版が相次いでいるが、いわゆる「啓発本」であって資料ではない）

そのため、まず郷土資料の充実が優先された。平成19年度（2007）以降の取組みは以下のとおりである。

- ・ 県内外の古書店や古本市の情報を収集し、関連資料を逐次購入
- ・ 郷土資料の校訂復刻版を発刊。『郷土研究 神守村』（原本は昭和15年。平成20年復刻）
- ・ 旧館以来の未登録資料を整理登録（約7000冊：一部郷土資料を含む）

- ・散在した昭和初期の都市計画図を収集。『昭和初年津島風俗画集－津島町発展計画案－』（平成 23 年）として発刊。
- ・戦時下の津島の記録映像 6 リールを借受。図書館でデジタル化した上、ナレーションを付し、DVD として公開（平成 23 年度予定）。
- ・各方面から明治～昭和 30 年代の津島の古写真を収集。現在 1700 枚。『記録写真 津島』として発刊（平成 23 年度予定）。

このほか、地元や近隣の旧家商家・学校・役場などにも出向いて様々な資料を借り受けた。唐突な申し出にも拘らず、いずれも全面協力していただき、地域における図書館施設の特性を再認識し得た。現在はこれらの資料のデータベース化と公開を予定している。

○間接レファレンスサービスへの取組み

郷土に関するレファレンスコレクションとして、近隣自治体の学芸員とともに『海部津島人名事典』（平成 23 年）を刊行した。これは、平成 19 年度から海部地域の学芸員と連携した結果である。

このほか、職員が手掛ける館内展示や郷土講座で、館蔵資料や事象の紹介・解説等を行っている。これには地元のガイドボランティアや郷土研究家の助言も頂いている。今年行った職員主催のものを抜き出すと、以下のとおり。

【郷土史講座】

- ・明治の津島（2011.1）、大正の津島（2011.2）、昭和初期の津島（2011.3）
- 今年度も 1～3 月を予定

【館内展示】

- ・1 月 「卯年と津島の 120 年展」
- ・1～2 月 「新春めでたづくし ～図書館所蔵品展によせて～」
- ・3～5 月 「パパ・ママが Kids だったころ－1976 年津島写真展①、②－」
- ・6 月 「昭和 36 年 6 月集中豪雨から 50 年」
- ・6～10 月 「海部・津島の絵地図展①、②」
- ・11 月～ 「100 年前の商品マーク展 ー大正津島の商標博覧ー」

近現代の郷土資料は、地域レベルで俯瞰すると分量が多くジャンルも細分化されているため、よほど時間をかけなければ全体の把握は難しい。このため、展示や講座、HP でも様々なテーマで館蔵資料の横断紹介を行い、典拠を一々示すことで間接レファレンスの一助としている。

今後もこれらの事業を継続し、冊子にまとめてレファレンスコレクションの充実を図る一方、より多くの方々と協同して地域の調査や再発見を重ね、新たな地域事業に発展させることが必要と考えている。